

令和元年度「学力向上実践研究推進事業」研究報告書【協力校】

都道府県名	奈良県	番号	29
-------	-----	----	----

協力校名	奈良県宇陀市立菟田野中学校
------	---------------

1. 協力校における学力の現状と課題

本校では、長年「基礎、基本的な学力が定着していない」「家庭学習の習慣がついていない」といった低学力傾向の生徒が多く、学習規律の点でも授業への集中力がなく、落ち着いて授業を受けることができない、居眠りをする生徒が多い、など、学力・生活両面で、大きな課題を抱え、そういった課題への対応も、なかなか全校あげて組織的に対応する体制が整わない学校であった。

そこで平成28年度より、学力向上に向けて、全校をあげて取り組む体制づくりを整え、段階的にはあるが、以下のような点に重点を絞り、学力向上に向けた取組を行ってきた。

①授業のユニバーサルデザイン化 ②授業での言語活動の重視

③家庭学習を身に付ける取組

そうした、全校をあげて取り組む体制が次第にできてくる中、生徒が落ち着いて授業を受ける態度や、基礎学力面での向上といった点で、変化が形として見えてきた。

そこで、本研究に際し、これまでの取組を踏まえながら、より確かな学校変革・学力向上を目指して、実感できる変革を作りだして行こうと、研究の柱として次の二点に重点を置き取組を行った。

①「自主学習ノート」を通じた家庭学習の充実。

②「学び合い」（少人数での話し合いやグループ活動を行うことで、つまずき立ち止まる生徒が参加でき、互いを高め合う授業を目指す）を大切にされた授業研究。

2. 協力校の取組状況

(1) 「自主学習ノート」を通じた家庭学習の充実

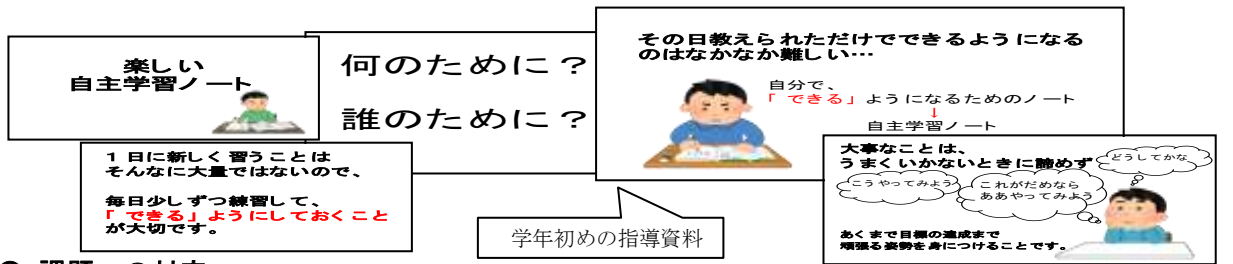
生徒の実態として、一昨年度調査で、「普段の家庭学習の時間、30分未満の生徒」が、現3年で71%といった、学習習慣が作れていない厳しい状況であった。そこで、昨年度より家庭学習の習慣化を目指して、「自主学習ノート」の取組を全校で実施（毎日1ページ、自主学習を行ってくる）。学力向上部（学級担任の集まり）で定期的に点検と指導方法の交流を図りながら、取り組んだ。

その結果、家庭学習の習慣化は、一年目で大きく向上（【資料1】30分未満：23%）、二年目の本年は、いかに生徒のモチベーションを上げ、また内容をより主体的な深まりのある取組にするか、また様々な理由で継続できない生徒への対応等を課題として取り組んでいった。

○ 取組の主な工夫

- ・生徒へのモデルノートの提示（最初により学習のまとめ方や方法を例として示す）
- ・よいノートを取り上げ、終わりの会で紹介、学級掲示を行う。紹介するものは、真似してほしい勉強法や分かりやすい単語の覚え方、その時期に関係する豆知識など多岐に渡り、様々な分野に関心を持てるようにした。
- ・「今日のベストノート」の表彰。
- ・スタンプや「できたシール」を貼る。
- ・先生からのコメントは、学年担当全員で行う。より深い学びに向けたコメント力が必要。

などがあるが、副次的な効果として教師と生徒とのコミュニケーションツールとして、信頼関係を深めるのに役立ったとの意見も多かった。また、上手く自主ノートを活用できている生徒は、定期テストの勉強としてもうまく活用できている様子も見られた。



○ 課題への対応

課題として出てきたことには、生徒の実態に合わせ、以下のような対応を行った。

- ・忘れてくる生徒への対応 →放課後学習を行う。
- ・自分で学習する方法がわからない生徒への対応 →こちらからプリントなど個人にあった学習内容を与える。
- ・マンネリ化の打開 →2 学期より週1回自分でテストを作る日をもうける、毎回「めあて」を書く等を行った。

また、昨年度より、地域の菟田野小学校との連携を深め、小中教員での小中教育部会を立ち上げ、そこでもこの「自主学習ノート」を小中共通のテーマとし、互いに交流しながら、小中9学年で同じ目標の下、取り組んだ。小中が共に一貫した取組を行うことによって、子どもたちを継続して伸ばすことができる体制ができてきた。



(2) 「学び合い」(少人数での話し合いやグループ活動を行うことで、つまづき立ち止まる生徒が参加でき、互いを高め合う授業を目指す)と「振り返り」を大切にした授業研究

昨年度当初の実態として、落ち着いた話を聞けるようになってきたとはいえ、2、3年生の中には、授業への集中力がすぐとぎれ、話を聞いていない、他の話しをする、居眠りをするといった生徒が見受けられた。その背景には、基礎基本の力の不足から、「内容がわからない」や、学習習慣、学習経験の少なさからくる学習への集中力の不足「勉強の方法がわからない」がある。

本校生徒は、部活動が熱心で、厳しいトレーニング、練習にも耐える集中力を持っていることから、その学習方法さえわかれば、授業への集中力はついてくると考え、学ぶ「内容や方法がわかる」授業を目指し、まず「学び合い」の方法を取り入れた。

ここでいう「学び合い」は、少人数、2～4人のグループで、互いの交流を通して、以下のような「ねらい」をもって授業に取り入れる。※特に、④⑤を重視する。

- ①習得した知識の再構成のための学び合いをする。
- ②自分で考え、発言する、人の意見を聴くといった活動を通して、学びを深め、主体性を育てる。
- ③一人ひとりが活動していない時間を減らす。そのため、人数を少なくし、2～4人とする。
- ④わかっていない生徒が、何もしない時間、思考を止めている時間を減らし、理解を助ける活動を目指す。何よりも「学び」をあきらめさせない活動とする。
- ⑤教え合うことを通して、わかっている生徒は、人に話し伝えることで、より確かな理解へとつなげる。
- ⑥なかまとして、支え合い、人と協力できる集団づくりをする。
- ⑦意見のすりあわせや発表といった活動を通して、コミュニケーション力、問題解決能力を育てる。

まず学級では、生徒に「学び合い」を大切にする意義を伝え、そのための活動のルールとして、教室に『「学び合い」のルール』を掲示し、「学習班」を特に作り、各教科の授業の中で積極的に「学び合い」活動を活用するようにした。

2年間の継続した取組から、日常的に各教科で、少人数での活動を取り入れられるようになった。その結果、班活動での話し合いが、時間的にもスムーズに、交流も活発に行えるようになり、「学び合い」活動が定着してきた。

各教科での主な取組例としては、次のようなものがある。

・**数学**：課題解決（「平面図形」「図形の性質と合同」「携帯電話の料金プラン」等）、練習問題等・・・生徒が互いの考えを述べ、学び合う、自らの考えと異なる考えに触れ考えが深まるよう指導。自分からわからない問題を聞きに行く姿が見られた。

・**国語**：「日本の商品を海外に売る」プレゼンをペアで行う・漢字、語句のゲーム（「漢字しりとり」「四字熟語トランプ」等）・「竹取物語悲しみの深い人物ランキング」等・・・ゲームを取り入れることで意欲的に活動。漢字ゲームは漢字小テストにも効果が表れた。

・**英語**：「話す」「読む」活動ではグループ、ペア活動、分からない内容について「学び合い」活動で教え合いを行う。英語が得意な生徒が苦手な生徒に教える場面が増えた。授業に取り組む姿勢も前向きになった。

・**社会**：資料活用でのバズ学習・前半に知識を得た後、後半にディベートを行う形式・難問ワークシート等・・・興味を持って話し合う姿があり、随時ヒントとなる資料を提示することで、どの班もこちらの意図した答えにたどり着いている。資料の活用を繰り返すことで、初めて見る資料においても特徴等を指摘し、他者と議論できるようになってきた。

（3）学力向上に向けた、個別の支援体制の充実を目指す取組

個別の支援体制の充実という点で、全学年、以下のような学習支援の取組を行っている。

- ・授業のユニバーサルデザイン化、「UDAスタンダード」の実践。特別支援学級生だけでなく、全ての生徒に「わかりやすい授業」を目指すため、授業のユニバーサル化に取り組む。
- ・朝の学習の時間(10分)・1.2年は読書、3年は自主学習講座を行う。チャイム着席で自分たちだけでも静かに読書したりすることで、落ち着いた状態での一日の始まりが身についている。
- ・夏休み(6日)・冬休み(2日)質問教室・各自が学習したい教科に取り組む、日頃の「わからない」をなくす取組。日頃一人で学習できない生徒への支援、働きかけができる。
- ・定期テスト前1週間の放課後・希望者が教室に残り、自主学習をする。わからないところや質問があれば教師に聞く。つまずきのある生徒への支援、働きかけができる。
- ・日頃の放課後、学習・質問がある時、自習したい時、放課後残って教室で学習、教師に聞くことができる。
- ・学校・地域パートナーシップ事業の一環として「うたの土曜塾」を行う。



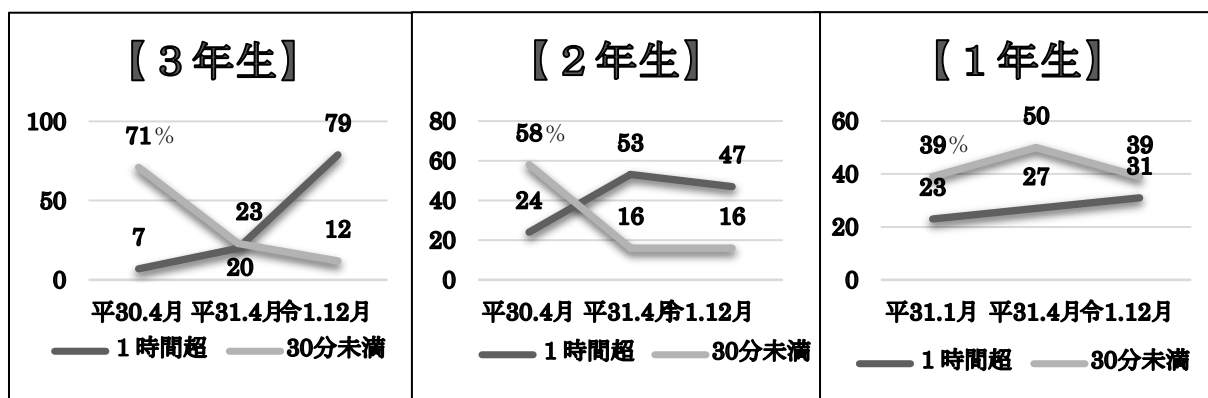
対象は3年生の希望者で、地域住民の方(本年は6名の方の応募があった)による学習支援の活動で、本校卒業の大学生や教職を退職された方などが、ボランティアで3年生の学習支援をしてもらう。すでに8年前から実施しているもので、地域のボランティアの方の支えが生徒たちにも大切なものとして伝わり、学習意欲の喚起につながっている。この取組からも自分の進路選択に向けた学習習慣の確立につなげたい。

- 目的 本校3年生の自主学習習慣の定着及び、基礎学力の定着を目指す。
- 日時 2学期から3月までの土曜日 午前9:00~11:00

3. 実践研究の成果

○「自主学習ノート」について

【資料1】「ふだんの学校以外での勉強時間」推移(1年生は小学校1月からの比較)



・「ふだん家での勉強時間」がこの取組を初めて2年間で大きく変化した。「30分未満の生徒」が、3年生で71%から12%へ、2年生で58%から16%になり、「1時間超の勉強時間」3年生の7%が79%に伸びたように各学年共に伸びている。毎日ほとんどの生徒がノートを提出しており、確実に家庭学習が定着してきたと考えられる。学校からの働きかけにより、生徒が家庭で机に向かう時間が確実に増え、習慣となってきた。

・様々な勉強のパターンを身につけられるようになってきた。学級に紹介した良いノートを参考に、勉強してくる生徒も多い。また取組を始めた昨年度前半は、授業で書いたノートをそのまま

「自主学習ノート」に写すだけの生徒も多かったが、今では問題演習をすることも増え、間違えた問題はすぐやり直す癖がついてきた者もいる。これは、日曜に問題作りをしていることや教員のアドバイスや声かけが要因になっていると考えられる。

- ・課題は、学力につながるノートになっているかという点である。丁寧さやきれいさに時間を費やし、内容の間違いに気付いていない場合がある。今後、勉強に対する意欲を今以上に高め、学習の資質の向上が求められる。

- ・小中連携の活動を進めることができた。実際に教員が動き、互いに意見交流をする機会ができたことで、指導者である教員それぞれに義務教育9年間としての、教育の視野が広がり、全体で方向性を合わせ、何を大切にするか意識が出てきた。

○「学び合い」活動について

- ・授業での規律が保たれ、落ち着いた環境で授業を行えるようになった。（参考下【資料3】）そんな中で「学び合い」活動も、定着して、数年前までは「わからない」ために授業へ参加できていない生徒が目立っていたが、それがクラス全体で「学び合い」活動を行い、その中で、互いに意見を交流し、それを全体へ発表する活動がきちんとできるようになった。それと共に、生徒の「わかる」と答える割合が増えてきて、授業が「楽しい」といった言葉がよく聞けるようになった。ここからも、授業のわかりやすさと、学ぶ意欲が強く連動していることがわかる。

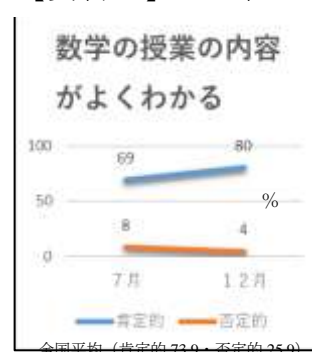
右の【資料2】のように特に3年生は、この「学び合い」活動が、うまく作用し、「授業の内容がよくわかる」が増加し、学習への参加の様子も、とても積極的になった。「学び合い」の効果として、本校は学力面ではまだまだ低学力傾向である状態にもかかわらず、「授業の内容がよくわかる」と答えた生徒が数学、国語共に全国平均を上回った。ただし、本校調査には、「どちらでもない」の選択肢があるが、それを考慮しても、特に「わからない」生徒が、全国平均より大幅に少ない。「学び合い」活動が、教科での「わからない」つまりきの解消や、授業への参加の度合いの向上に効果が表れていると考えられる。

- ・1月のアンケートで「自分の学力向上に、とても役にたったと思うもの」として生徒があげたものは、昨年より始めた「自主学習ノート」が38%（昨年51%）、「学び合い」が25%（昨年27%）であった。共に生徒自身もその効果を実感として感じていると思われる。

- ・「学び合い」の活動がスムーズにできるようになり、わからないこともすぐに聞いたり、教えたりする姿がある。人にわからないと言うことは、大きな抵抗があるものだが、それが活発に行えている。この活動は、信頼できる学級のなかま集団があって、初めて成立するもので、これまで本校で伝統的に重視し取り組んでいる人権学習の取組が、人を大切に、なかまで支え合う姿勢を積極的に行う活動として、学習態度の中でも生きてきている。

【資料2】

【資料2】 3年生



平 31 全国学習状況	学校に行くのは楽	学校の規則を守っ	人が困っていると	いじめは、どんな
-------------	----------	----------	----------	----------

調査 「肯定的」%	しいと思う	ている	きは進んで助ける	理由があってもい けないことだ
本校 (H29 年度)	92.4	100 (90.7)	88.5 (81.2)	100 (90.7)
全国平均	81.9	98.2	85.9	95.1

逆に、クラスで「なかまづくり」で課題が生じると、とたんに、この活動に表れ、効果が消えてしまう状況があった。まさに人権意識を高め、互いを認め合える関係、自分の思いを抵抗なく発信できるクラスづくりが、この活動、教育そのものの土台となっていることを、教員全員で実感しており、そのためにも、改めて、人権を大切に学習を、何よりも重要な学校の柱として、教育を進めたい。

・「学び合い」活動をする中で、社会科の1年集団の一学期末と2学期中間テスト得点の変化をみると、次の【資料4】のように、学習集団（グループ）の成績に変化が見られた。なお、グループは好きな者で集まり、一定同じメンバーだった。

【資料4】

		一学期偏差	二学期偏差	
A1		32.78	28.63	↓
A2		54.57	47.55	↓
B1	◎	56.79	59.87	↑
B2		41.23	44.47	↑
C1	◎	58.57	62.95	↑
C2	○	55.01	53.71	→
C3	○	45.23	47.55	↑
D1	◎	59.46	59.43	→
D2		33.67	35.23	↑
D3		32.33	45.79	↑

※○◎は積極的に教える生徒

① 元の得点の高い低いに関わらず、同じグループで上がる、下がるが共通した動きが見られた。

② 上がったグループは、交流が活発で、常に交流しながら課題にあたっていた。逆に、下がったところは、交流が非常に低調だった。

③ 上がったグループでは、ほとんど一人で問題を解くことができなく、自分ができたら他に教える姿が多く見られた。

④ 積極的に教える生徒は、高得点であった。

以上の点から、「学び合い」に積極的に取り組んでいた生徒は、学力も向上しており、それは、グループ内で、互いに引っ張られる形で、影響が表れている傾向がある。ここに「学び合い」活動の特徴、効果が表れていることがわかる。

4. 今後の課題

○ 規律ある授業、生徒の興味関心を高める授業は、「わかる」授業からであることを改めて学校全体で共通認識し、更なる授業実践の研究を進める必要がある。「学び合い」は、あくまでも活動方法であるので、それを通したより「わかる」授業、より「おもしろい」授業を目指し、授業力をあげるための研修、研究を進めたい。特に、主体的で深い学びのためには、生徒にいかにか考えさせるかを大切にする必要があり、そのための方法として、話し合い後の、「書く」活動を重視し、「書く振り返り」もあわせて今後も研修を深めたい。

○ 学習への取組は、大きく二極化しており、そのため、学習をしていない、できない生徒への対応が大きな課題である。「自主学習ノート」を続けつつ、基礎基本のつまずきをできる限りなくす取組を進めたい。同時に、自分で計画を立てて進めることができるよう、生徒の学習に向けた主体性を伸ばし、より確かな学力向上へつなげたい。

○ より良い学びの環境のためには、やはり人権が尊重される環境であることが何よりも重要であることを再認識し、今後も、なかまを大切にする人権学習の深化に努めたい。